

宋版一切経表紙芯紙に見える反故紙について

中村 一紀

はじめに

書陵部所蔵の一切経は福州版と称されるもので、現存全六二六三帖のうち字音帖五三〇帖を除く五七三三帖中『大般若波羅蜜多經』以下一五二〇帖を東禪寺版で、その他若干の写本を除いた部分を開元寺版で構成する混合蔵である（字音帖の版式については今しばらくの精査が必要であろう）。

東禪寺版一切経は、經典に刻される題記から北宋元豊三年（一〇六〇）頃から政和二年（一一三二）頃までに福建路福州の東禪等覺院において開版された。殆ど時をおかず同じ福州の開元寺版が政和二年頃から南宋紹興二十一年（一一五二）頃までに開版した一切経を開元寺版と称し、この二蔵を総して福州版とよぶ。以後版木の劣化などを主因として元代まで補刻がつづくが、補刻に際しては多くは喜捨を募りその財により開版している。そのことはその規模により巻の末尾や各丁に記録され、施財記として見る事が出来る。本蔵中最も時代の降る年次の明確な補刻記は、何字函『大方廣仏華嚴經合論』（東禪寺版）巻二四に見える「古本此葉漏二十二字淳祐辛亥吉日刊補記」で淳祐十一年（一一五二）のことである。従って本蔵はこれ以後に印造されたものである事がわかり、現

在国内に存する福州版では最も時代が降る部類に入る。また、周知のように『大般若波羅蜜多經』には京都西山法華山寺の慶政上人の捨財刊記「日本國僧慶政捨」を有し、更に開元寺版には「法華山寺」印が見られ、その性格が蔵書印ではなく発注者の目印のため工房で捺したと考えられることから、本蔵は上人が九条家の支援を受けつつ自らが将来したものと認められる⁽¹⁾。

本蔵の舶載時期については、『風雅和歌集』巻一八に

式乾門院十三年の法事に、法華山寺にて唐本の一切経供養せられける時、

空に音楽のきこえければ、よみ侍りける 慶政上人

法の庭 空に樂こそきこゆなれ 雲のあなたに花やちるらむ

と、上人の和歌が収載されており、ここに詠まれている一切経が本蔵に比定できる。式乾門院即ち後高倉院皇女利子内親王は建長三年に薨じているから、その十三回忌は弘長三年（一一六三）にあたる。もちろん上人はこの法事のために本蔵を将来したわけではないだろうが、少なくともこの時点ではすでに法華山寺に安置されていたのである。したがって舶載時期は、先の補刻記に見られる一一五一年からこの一一六三年の間、おそらくは一一六〇年を降った頃と考えてよからう。

その装丁は折本をくるみ表紙で包み、押え竹を施し巻緒を付したもので、『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店 一九九九）でいうところの経摺装である。本文料紙は黄檗染め厚手の竹紙で、その外寸は大概縦30・9・横11・2センチ前後で東禅寺版、開元寺版ともにほぼ同じい。一紙五折六面、一面六行、一行一七字を基本形とするが、一紙四折五面のものや一行字数の前後するものもある。その大多数が現在も原装を保っているが、このことは表紙芯紙の一部に本蔵と同時代と考えてよい摺経や文書の類からなる反故紙が用いられていることからかも知ることが出来る。表紙は竹紙の薄様を藍染めしたものであるが、この薄様のままでは表紙には使えないため裏面に本紙と同じような黄檗染竹紙を用い、その間に右のような芯紙を挟む三重構造である。ところがそれらの中には経年のために糊離れが生じ芯紙が露出しているものがある。本稿では、これら露出した芯紙のうち文書等の反故紙が用いられている六点を紹介していく。

一、一号反故紙（図1-1）

八（七に重ね書き）

① 二半 六二葉 七片二

一上半

② 驚三 一上二 ③ 二一 一 三片 三 二三片 ④ 九 十二片

十一前一

十 後一

十五下二



図1-1

⑤ 五 三五片 ⑥ 十一 三上半

六中

⑦ 七 十二三片 ⑧ 四 十二上二 ⑨ 六 二中 ⑩ 音 三後一

（丸数字は筆者）

所在 丁字函（書陵部序列一二六号）『大集会正法経』卷三（開元寺版）

料紙 黄檗染竹紙

法量 縦30・6 横8・6（センチ、共に最長部、以下同）

本紙は断片と思われるが、くるみ表紙の谷折り部から左前部分の芯紙に用いられている。④「九十二片」中ほどの、は刃物による傷。断片左端の二条の筋は谷折り部分をくるむ際の折り目に当たる。なおその左側に見える摺経も反故紙である。

先述のように福州版一切経の料紙は一紙を五折六面で構成するのが基本で、その一紙分は一紙で印刷することを原則としているようであるが、中には六面中の何面か分を当初の用紙から切除し、新たに印刷するなりして他の用紙で補完しているものを多く見る。補完された面は、字体や界高などの状況からみて同じ版木で再度印刷しているものが殆どである。紙はどちらも黄檗染め厚手の竹紙であり、さらに補完された料紙の裏には本蔵によく見られる「開元経局染黄紙」の長方朱印(14・8×4・8)が認められることもあるので後世に補われたものではないと判断できる。

さて、ここに紹介する一号反故紙は、そこに記される漢字や数字を後述のように実物に即して照合したところ、右に記したような切除補完についてのメモ的な記録であることが明らかになった。

はじめに文書の中で使用されている語句について説明する。

まず②の「驚三」の「驚」字は一切経の序列を表す千字文と見当がつく。③以降に千字文と思われる漢字は見られないから、②から⑩はすべて驚字函に關する事と考える。驚字函(書陵部序列第九四号)には「雜寶藏經」八卷及び「那先經」三卷が入蔵されている。次の「三」字はその三帖目で「雜寶藏經」卷三を指す。同様に③以降の丸数字を付した漢数字も帖数を表す。ではその下に記されている「一上半」などの語句は何を意味するのであろうか。

実物に照らしたところこれらの数字や漢字はその帖の紙数や面数を示していることがわかった。

使われている漢字には「上」「中」「下」「半」及び「前」「後」「片」が見られる。まず前者では一紙全六面のうち二面ごとを指す場合は「上二」、「中」、「下二」、六面を二分しその第一面から三面を指す場合は「上半」のようになっている。これに対して後者は単面を指す場合に用いているようで、第一面と最後の第六面にはそれぞれ「前一」「後一」を、第二面から五面のいずれかを指す場合、例えば第三面は「三片」のように用い、使い分けをしている。

具体的に見てみると、②「驚三一上半」の「一」は第一紙、「上半」を全六面の上半分、即ち第一面から三面と解すると、この意味するところは驚三即ち「雜寶藏經」卷三の第一紙第一面から三面となる。

その左に記されている「十一前一」「十五下二」については、「前一」を第一面、「下二」を第五・六面と解すると、前者は「雜寶藏經」卷三の第十一紙第一面、後者は第十五紙の第五・六面にあたる。

つづいて、その下に記される③「一一三片三一二三片十後一」を見ると、頭に記される「二」は第二帖であるから「雜寶藏經」卷二となる。次の「一三片」は第一紙の第三面を指し、つづく「三一二三片」は第三紙の第二・三面となり、「十後一」は一紙の最後の面であるから第十紙第三面となる。

⑩の「音」は、各字函に付随する音釈を意味する。音釈は東禪寺版のはじめのころは各巻巻末に刻されていたと考えられ、本蔵の中にもそういう形式がわずかに残るが、後に別帖にまとめられて各字函に付随するようになった。

書陵部では字音帖と称している。図1-2は音釈の補完部であるが、たまたまもとの料紙の折り目に文字がかかっていて下方の「二字音」の三文字が補完紙の下からのぞいている。

このような理解に基づいて①から⑩を整理してみると、

八(七に重ね書き)

① 二半 六二葉 七片一

(不詳)

② 驚字函第三帖、『雑寶藏経』卷三)

一上半 (第一紙第一・三面)

一上二 (第一紙一・二面)

十一前一 (第一一紙第一面)

十五下二 (第一五紙五・六面)

③ 二(驚字函第二帖、『雑寶藏経』卷二)

一 三片 (第一紙第三面)

三 二三片 (第三紙第二・三面)

十 後一 (第一〇紙第六面)

④ 九(驚字函第九帖、『那先経』卷上)

十 二片 (第一〇紙第二面)

⑤ 五(驚字函第五帖、『雑寶藏経』卷五)

三 五片 (第三紙第五面)

⑥ 十一(驚字函第一一帖、『那先経』卷下)

三 上半 (第三紙第一・三面)

六 中 (第六紙三・四面)

那先經卷上九
 捷勞 下上呼高反 傍反 佻伴 下上步 羊杜反 螳飛 反上紆緣
 端 蠕動 軟上音 怒揮 和上音 頸 陂 下上音 皇 錫頭 上
 燥 口上音 燥 蘇 賈 客 上音 非 古 作 儲 畜 上音 錫 頭 上
 的 別 反 脚 脚 上音 解 喘 息 上音 輻 轂 上音 錫 頭 上
 圓 軛 音 輿 與 音 扛 江 剛 吹 笳 上音 加 下音 鍛 金 上音 丁 簫
 吹 舊 音 蕭 蕭 拜 反 吹 正 裝 音 隸 正 革 屨 下音 所 一 量
 力 下 正 作 輪 輸 獲 麥 郭 上 胡 刈 反 魚 吹 瀾 度 例 上 音 猗 魯

補完面

侍 直理切及侍也 唯 荒旦反及與同 正作囉
 一 於 商 反 雙 吐 亦 陸 瀆 米 澆 音 肥 房 非 範 中
 上 徒 損 反 蓬 反 卷中十
 輿 許 救 甜 徒 添 徑 古 突 蘇 魯 果 未 榘 下音 沛
 昔 蓋 反 蚊 渠 支 反 蠅 同 前 材 椽 下音 黛 家 上音 鑽
 子 官 火 燧 下音 捌 眼 上音 行 徹 直 列 反 相 扞
 下 音 底 繒 帛 上音 鋪 斗 女 葱 蒜 下音 鹽 豉 上
 時 字 下 作 糲 糲 反 牛 軛 同 前 儲 除 音 雌 莖 下音 合

⑦ 七(驚字函第七帖、『雑寶藏経』卷七)

十二 三片 (第一二紙第三面)

⑧ 四(驚字函第四帖、『雑寶藏経』卷四)

十二 上二 (第一二紙第一・二面)

図1-2

⑨ 六（驚字函第六帖、『雜寶藏經』卷六）

二 中 （第二紙第三・四面）

⑩ 音（驚字函音釈） 三 後 一 （第三紙第六面）

となる。このうち①については驚字函には該当する箇所はなく、おそらくほかの字函であろうと思われるが、「二半」「葉」「七（あるいは八）片」と②以降とは異なる使い方がされている。「七」に重ね書きされている「八」字右端が切られていることから、右側にも別な記録が存した可能性もあり、この断片一枚からは残念ながら明らかに出来ない。このほかにも②⑤⑦に不審な部分がある。

まず、②「驚三」の「一」字の下に並記される「上半」「上二」である。右の解釈から見れば、両者は同じ第一紙の一・三面と一・二面を指すから三面を除き重複する。しかしこの両者はよく見ると墨色が異なり「上半」のほがわずかに薄い。またその上に記される横長「一」字も「上二」の上は重ね書きされているのである。したがって始めは一・二面だけを切除し補完する予定であったものが、三面までに変更され「上半」に書き変えられたと考えられる。『雜寶藏經』卷三の当該箇所をみると、「一上半」すなわち第一紙の一面から三面は四面から六面の料紙とは異なっていて、実際に「上半」分が補完されたことがわかる。

次に⑤及び⑦であるが、この該当箇所には現在補完は見られない。『雜寶藏經』卷五の第三紙、卷七の第一二紙の印面を見るといずれも良好で、わざわざ切除して補完する理由はないように思われるのである。卷七は東寺に同版本が存し、調査の結果印面の状況はどちらも良好である。とすれば訂正は

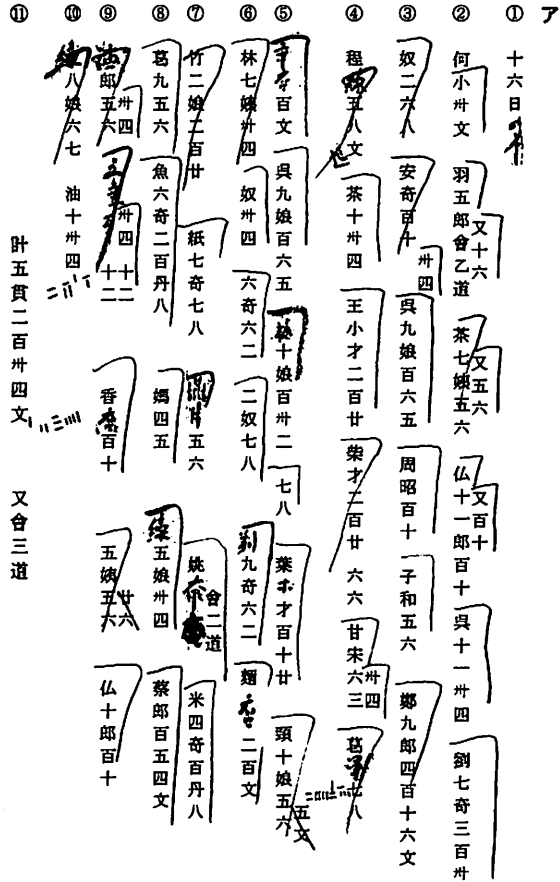
ないが、印面の状態から考えるとあるいはこの二紙に関しては全部を取り替えたものであるかも知れない。

なお同版として右の卷七以外に、東寺に『雜寶藏經』卷八、「那先經」卷上・下および音釈が、また、金沢文庫が『那先經』卷上と音釈を（他巻は散逸）現蔵している。この両蔵と書陵部蔵の印造時期については東寺、金沢文庫、書陵部の順と考えられているが、後者二蔵は舶載時期も含め時間差があまりないことが確認されている⁽²⁾。この三者の当該経を比較するに、切除補完されているのは書陵部蔵のみであり、補完された面は先述のように他の二蔵と同版で印面の状態も良好である。これらの状況から考えると切除補完の原因は版木の劣化によるものではなく、印面のズレや墨汚れなど印刷の不具合に起因したものであったろう⁽³⁾。

以上述べてきたようにこの一号反故紙は、一切経印刷後の不良部分等点検の際の覚書であり、見てのとおりその記載順序も帖の序列を追っていないところなど、いかにも現場のメモといった感がある。「驚」字函ではこの紙片に記された他に補完された部分は見られない。しかし他の経巻には同様に切除補完された部分が多く見られるので、印刷後に工程として点検作業があり、その後装丁に回されたものであろう。点検の覚書がこのような形で装丁の中に利用されていることで、印刷と装丁が同じ工房で行われていたことがわかる。更に一号反故紙の補完当該巻が本蔵に含まれていることから、印刷から装丁の作業は時を移さずして行われたことも示している。

二、二号反故紙

表面 (ア) (図2-1)、裏面 (イ) (図2-2)

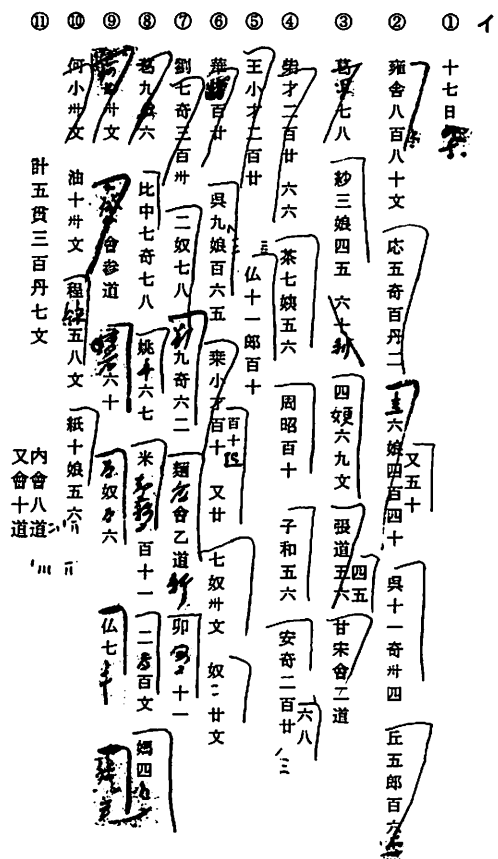


所在 辭字函 (書陵部序列五八号) 『過去現在因果経』卷五 (開元寺版)

料紙 黄槩染竹紙

法量 縦29・6 横21・4

書誌 一紙の表・裏に記されており、ア面を表紙に接して表紙の背から左前部分に天地を逆にして貼り込まれている。中央左寄りに見られる二条の筋は折り本仕立ての折り部分をくるむ際の折れ目に当たる。



したがって天地正位置でアは左端、イは右端がくるみ表紙の左前の端に位置する。ア右端折れ目は山折り部で右前へ回る芯紙との突き合わせ部である。

三、三号反故紙

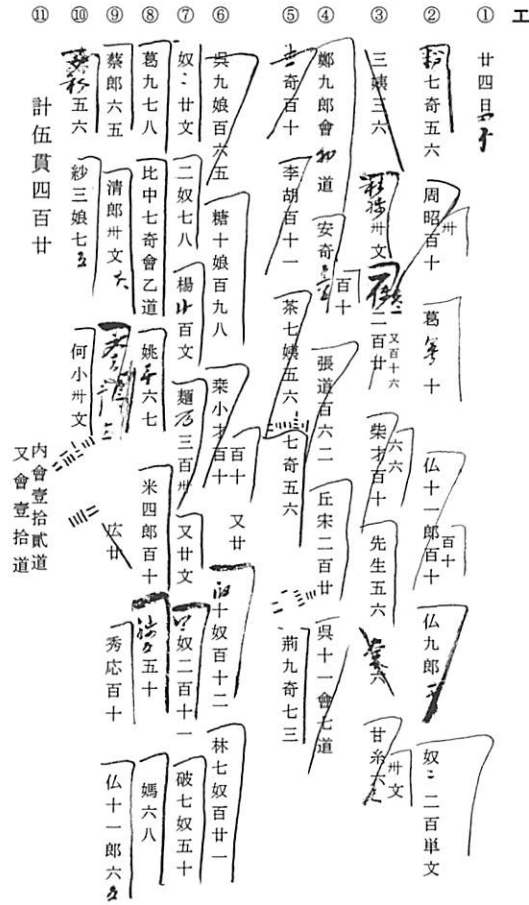
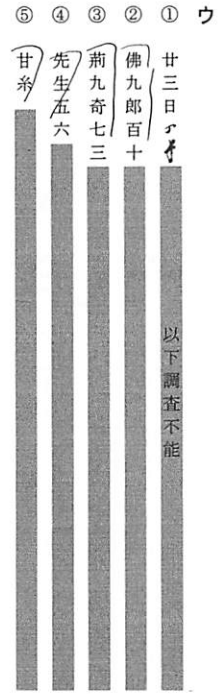
表面 (ウ) (図3-1)、裏面 (エ) (図3-2)

所在 悪字函 (書陵部序列四三号) 『瑜伽師地論』卷四一 (開元寺版)

料紙 黄槩染竹紙

法量 縦29・5 横21・1

書誌 二号と同様一紙の表裏でエ面を表紙に接し表紙の背から右前部分に

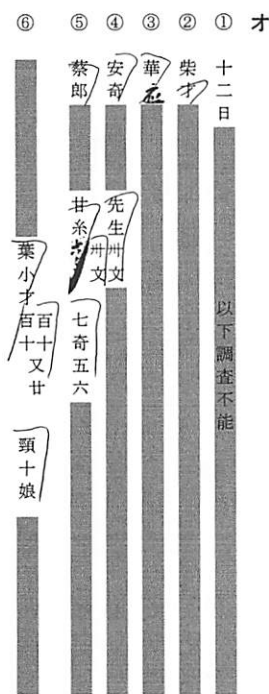


貼り込まれて、天地は正位置である。したがってエ面左端が表紙右前部分の端になる。この部分は表紙の押え竹のあったところで、左端に見える一条の筋は欠落した押え竹の圧迫痕である。中央左寄りに見られる二条の筋は折り本仕立ての山折れ部分をくるむ際の折れ目に当たる。但し、ウ面は表紙とのわずかな糊離れ部分から一部が

確認できるのみで、全体を調査する事は出来ない。

四、四号反故紙

表面(オ)(図4)、裏面(カ)(図不掲載)



所在 通字函(書陵部序列一〇三号)『高僧伝』下(開元寺版)

料紙 黄檗染竹紙

法量 縦29・3 横20・8

書誌 四号も二・三号同様表裏に記されるが、しかしここでもオ面の一部

のみが調査可能で、カ面は日付しか確認できない。オ面を表紙に接し天地を逆にして貼り込まれており、したがって天地正位置で右端がくるみ表紙右前となる。

以下は二号、四号に共通することであるが、料紙天地部は裁断された痕跡がない。天地の縁には極わずかに厚みがあることから、縁の部分は紙漉の時の耳であろう。したがってこれら料紙の左右は裁断されているが天地は抄紙当初のままである、との結論に達した。天

地寸法は一切経の天地寸から約一センチほど短い。

はじめに二号、四号を概観しておく。(図版11参照。以下人名中の□は各文書の写真又は翻字を参照。)

まず、二号三号ア、イ、エ(以下号は略しアイウで表示)は全く同形式の文書で、おそらく一部分しか調査できないウ、オ、カも同様と考えられ、一連のものであろう。

ア、イ、エは一紙に一行(以下行数を①②で示す)が記され、また、ア、イは④、⑤の間に、エは⑤、⑥の間にそれぞれ一行分の空白部分があり、書式に共通するところがある。イの⑤「王小才」と「佛十一郎」はほかより窮屈に書かれているので、書き足した可能性があり、はじめは空白であったと思われる。

次にそれぞれの冒頭には日付が記されており、(ア)「十六日」、(イ)「十七日」、(ウ)「廿三日」、(エ)「廿四日」、(オ)「十二日」、(カ)「十三日」とある。イは擦り消しされた上から「十七日」と記されるが、下の文字は読みとれない。その後には各紙とも人名が列挙されている(一部疑問なところもあるが今は人名としておく)。アに四五名、イに四三名、エに四七名が記され、ウ・オは一部分であるがそれぞれ五名、九名を見ることが出来る。このうち三四名が表に示したように数日にわたって重複して見られる。したがって実際には七八名の人たちが記されている。ところでこの文書には途中一行が空白になっている事を述べたが、重複してみられる人のうちア③⑤「呉九娘」、エ②④「佛十一郎」、エ②⑦「奴々」はそれぞれ空白の行を挟んで同日に出ているから空白の前後には何らかの区別があったのかも知れない。

記される名前には数字を用いる排行が使われている例が多く、その中には「娘」「姨」「嬢」を付した女性も含まれる。ア②の「茶七姨」、③の「呉九娘」などで、女性と確認できる名前は重複する人も含めアで一〇名、イで六名、エで五名、オ一名(調査可能部分のみ)が見られる。甘糸なども女性であろうか。また中には「佛九郎」「佛十郎」「佛十一郎」や「緯五娘」「緯八娘」、「茶七姨」「茶十」のように一族と思われる人々も見られる。

人名	所在	人名	所在
○何小	ア② イ⑩ エ⑩	○茶七姨	ア② イ④ エ⑤
○呉十一	ア② イ② エ④	○劉七	ア② イ⑦
○佛十一郎	ア② イ⑤ エ②⑨	○安奇	ア③ イ④ エ④ オ④
○呉九娘	ア③⑤ イ⑥ エ⑥	○周昭	ア③ イ④ エ②
○子和	ア③ イ④	○鄭九郎	ア③ エ④
○王小才	ア④ イ⑤	○程□	ア④ イ⑩
○甘末	ア④ イ③	○柴才	ア④ イ④ エ③ オ②
○頸十娘	ア⑤ オ⑥	○葛□	ア④ イ③
○二奴	ア⑥ イ⑦ エ⑦	○□九	ア⑥ イ⑦
媽四	ア⑧ イ⑧	○麵□	ア⑥ イ⑦ エ⑦
油十	ア⑩ イ⑩	○蔡郎	ア⑧ エ⑨ オ⑤
張道	イ③ エ④	○紗三娘	イ③ エ⑩
○乘小才	イ⑥ エ⑥	○華□	イ⑥ オ③
○奴□	イ⑥ エ②⑦	○林七奴	イ⑥ エ⑥
○姚□	イ⑧ エ⑧	○比中	イ⑧ エ⑧
佛九郎	ウ② エ②	○甘糸	ウ⑤ エ③ オ⑤
先生	ウ④ エ③ オ④	○荊九	ウ③ エ⑤

表

次に各紙とも人名の下にはそれぞれ数値が記されている。書き方は統一されていないがアの④「柴才一百廿六文」、「鄭九郎四百十六文」、⑥「麵□二百文」などあり、更に各文書の末尾には個々の数値に対応すると思われる合計数が、ア「計五貫二百卅四文」、イ「計五貫三百丹七文」、エ「計五貫四百廿」と記される。合計に「文」とあることからこの文書に記される数値は金銭と考えてよからう。個々には合点が施されているものと削除の意味か「\」を付しているものがあるが、おそらく合点が付されている数値が合計金額に対応するのであろう。ア、イ、エとも合計が五貫二百から四百文の範囲で、そこに記される人たちも皆四〇人代と一見揃えられたようにも見える。

ところで、これらの数値の中にはいくつか注意しなければならない点がある。ひとつには、右に挙げた複数日に登場してくる人々のうち一五人（表の人名上に○を付した）に記される数値が毎回同じであることである。例えばア②イ④エ⑤に見える「茶七姨」の数値は「五六」で、ア②エ②の「佛十一郎」の数値はすべて「百十」と記されている。

また、「五六」「七八」「四五」あるいは「百六五」のように単数字の並記だけで十の位が示されていないものがあり、前近代の文書にはこのような表記法は見られないが、しかし版本では左のような場合に限り散見できる。それは刻工が仕事量を申告するための方法として、その丁の雕刻字数を版心内に刻示する時である。例えば書陵部所蔵宋刊元修『前漢書』（四〇二・二）では、字数を「四百四五」「四百三五」などと刻する。このようにメモ的なものには略記することもあり、本文書もその記し方に下書的な様子が見てとれるので、右の「五六」なども同様に考えてよいと思われる。

更に数字に挟まれる漢字にもいくつか確定しがたい点がある。ア⑦「米四

奇百丹八」、⑧「魚六奇二百丹八」、イ①「応五奇百丹二」、⑩「計五貫三百丹七文」、エの②「奴□二百单文」、に見られる、「丹」「単」「奇」字である。「丹」「単」については、『事林廣記』（書陵部所蔵の元版による）辛集「算法類」の「累算数法」の項に、「二二单四」「三三一如六」「五二是十」「三三丹九」などの用例が見られる。積が十までの式に用いられており、零を意味するのであろうか。実際に、右に触れた『前漢書』巻九九上三三丁の版心に見られる字数表示に「五百丹九」と刻される例がある。この丁の本文と版心の刻工名・字数を除いた合計は五〇九字である。この例からも「丹」「単」字の区別は今明らかでないが、その意味は零を示すと考えてよからう。

今ひとつの「奇」字は各面のあちこちに記されており、やはり「丹」などと同様数学的な用語であらう。一般的に「奇」字は奇数、余数などの意味を持つが、ア②「呉十一卅四」は、イ②では「呉十一奇卅四」とあり、後者には同じ卅四でも奇を付しており、これは単なる書き落としかそれとも区別があるのか、惑うところである。以上のようにここに見られる数値は金銭であることにほぼ間違いないと思われるが、それにしても単純に金額が記されているのではないことは上記の通りである。

ここでもう一つ注意しておかねばならないのは右のような数字に混じって「会〇道」という語句が見られることである。アの②「羽五郎会乙道」、⑦「姚□会三道」、⑩「又会三道」、イの③「甘未会二道」、⑦「麵□会乙道□」、⑨「□□会参道」、⑩「内会八道」「又会十道」、エの④「鄭九郎会初道」、「呉十一会七道」、⑧「比中七奇会乙道」、⑩「内会壹拾貳道」「又会壹拾道」と見えるのがそれである。この「会」は宋代に何種類か発行された紙幣会子を指しており、また「〇道」は〇貫ということのようである。実は書陵

部一切経の施財記中にも同様の表記が見られる。即ち、魏字函『妙法蓮華經文句』卷十第三紙の二・三面間の山折り部に「住東文殊崇璇捨会十三道修板」とあるのがそれで、崇璇なる僧侶が第十卷三板目の補修に際して喜捨した記録である。⁽⁴⁾

こういう「会○道」について加藤繁氏は『宋史』食貨志下卷三の会子の項の「咸淳四年。以近頒見錢関子。貫作七百七十文足。十八界作每道二百五十七文足。」を引いて、「会一道即ち一貫を錢二百五十七文足と定めた」と説明されるから、⁽⁵⁾「会二道」では二貫分の会子の値となる。会子は紹興三十一年に一貫、二貫、三貫を、隆興元年に五百文、三百文、二百文の都合六種が発行されている。会子一貫の値には変動があり、嘉定八年(二三三)頃まではおよそ六百文代から七百文代を行き来していたという。しかし、景定四年(二五三)には二五〇文に、また、右の史料にもあるように咸淳四年(二五八)には二五七文に下落している。では本文書が作成された頃の会子一貫はどのくらいの値であつたろうか。本稿の初めにも述べたように、本蔵に見られる最終補刻記は淳祐一一年(二五五)のもので、印造はそれ以後となる。加藤氏は、会子の価値の下落は景定四年に始まったことではなく、その以前から対蒙古軍費の支弁のため会子が増発され、紹定五年(二三三)には発行高が三億を超え、値崩れを起こし始めたといわれる。そうであるなら、本蔵の印造時期には会子一貫の値は六〇〇文をかなり下回ってあるいは景定四年のころの相場に近かつたかも知れない。

以上のようにこの文書には銅銭と紙幣の二種類の貨幣が記されていることが明らかになった。しかし、会子についても不明なところがある。会子の合計には「内」「又」とあるが、その意味が今ひとつ明らかでない。アの合計

には「計五貫二百卅四文 又会三道」とあり、会三道の内訳は②「羽五郎会乙道」、⑦「姚□会一道」が該当しよう。②「乙道」の乙はこの場合二ではなく一であろう。乙は二番目の意味のほか一も意味し、本文書では「二道」は「二道」と記されるから乙は一と考えてよからう。このようにアでは一致したように見えるが、イ、エとも個々の会子数は「内」「又」どちらの数にも達しない。「内」が合計数に含まれるの意味であれば、会子を銅銭に換算したものが合計額に含まれていて、尚かつ「内会○道」と注記されているのであろうか。

このように、本文書は複雑な様相を帯びており現段階で筆者には個々の数値と合計の検算は出来ない。ところが、ア面の④や⑩の末、イ面の⑤中程や末尾合計の下、エ面の⑤中程や⑩末には文書の執筆者が集計の際の覚えとしたりと思われる符号が見られる。この符号は算木で数を表した形である。参考に記せば、一は — 、二は || 、五は |||| 、六は —| 、九は |||| 、十は —| 、十二は —|| 、十六は —| 、二十は —|| 、五十は —||| 、六十は —| 、八十は —|| などとなる。したがって八十一ならば —| という組み合わせになる。これらに従ってアについて見てみよう。アでは④末と⑩末及び合計の右下の三箇所に符号が見られる。まず④末は —||| と読み、 —||| となる。また⑩末は —| と読み、 —| である。ただこの場合右二番目の — は定型では「とも読めるが、よく見ると若干上方にあがっていて、このような書方は同じくア合計右下に見える符号にも見られる。これは、六十以上の十位の上縦棒だけを流用し、五十と読ませるのだらう。合計右下の符号 —||| もそのように見れば —||| となる。そしてこの —||| は前二つの数の和となり、それは合計金額の五貫二百三十四文に合致する。

次にエを見てみると、⑤「茶七姨五六」下に「三三三三」、同じく「□九奇七三三」の上に「三三三」と記される。前者は2482、後者は2543と読める。ここでも後者左二番目の「」は六以上の一位の上横棒を流用し五と読ませるのであろう。また、⑩末の「三三三三」は2873となり、⑤の後者と合わせれば5416で、合計額とは四文の不足が出る。ところがその下に「三三三」とあり、これは280と読めるから、これで五貫四二〇文となる。

イについては末尾に「三三三」と見え、これは「三」一字あけて「三」と見える。合計に「五貫三百丹七」とあるから、この一字空け部分に丹字、先に触れたように丹を零と考えるなら530となる。このようにこれら三通に見られる算木の符号は各末尾に記される合計数と一致することがわかる。したがってこれらの符号による限り各日に記される合計数はその日ごとのものであることは確かめられた。

最後にこれら文書の年代であるが、再三触れているように本蔵は一二五一年以後の印造である。船載時期は一二六三年をわずかに上る、金沢文庫蔵とほぼ同時期くらいと考えられる。本文書が成立してから反故にされるまでの期間は長くて数年として、この文書の年代は一二五〇年代後半から六〇年代極初と考えてほぼ間違いないだろう。

ここで改めて本文書の特徴をまとめてみると、

この文書は印刷装潢に携わる工房の帳簿で日ごとに付けられていること
使われている貨幣には銅銭と紙幣が見られること

記される人々の約半数三四人が複数日に記されていること

複数日に見られる人たちのうち一五人の金額が毎回同じであること

ここに出てくる人たちの中には一族と考えてよい人たちがいること

以上の点から考えられることは、この文書は南宋後期の福州の印刷装潢工房の日計による帳簿である。そしてここに見られる人たちは工房の関係者と考えてよからう。ある程度の期間内に同一人物が三四人も登場することは、彼らを工房関係者と考えることが一番ふさわしい。また、同族の人たちが見られることは工房付近に一族が住みその何人かが工房で働いていた、と考えることが出来る。ところで今ある程度の期間といったが、これらの文書には日付は記されるが年月はない。この帳簿が毎日規則正しく一紙の表裏に付けられていたと仮定した時、偶数日で始まる一二日から一七日までと、奇数日で始まる二三、二四日では表裏にズレが出てくる。このズレがどこから来ることが問題となるが、あるいは月の大小に関わるものであるかも知れない。つまり前月の晦日と当月一日が一紙に記された場合と、一日、二日が一紙に記された場合のズレである。そうであれば一二日から一七日までと二三、二四日は別の月という推測が成り立ち、最短で一ヶ月離れることになる。もちろん二・三・四号反故紙が皆別月という可能性もある。しかしながら複数日に記されている人たちの半数に同額の数値が見られることは、あまり時間の隔たりがないことも想定させる。いずれにしても少ない事例からの推測であり、⁽⁶⁾ 確定的なことはいえないが、上記の期間はあまり長いものではなかったろう。

ではこの帳簿が何に関するものか、という点については色々憶測は出来るが残念ながらそれ以上には到らなかった。先にも述べたようにここに記される数値が複雑で筆者にはその確定が出来なかったことが要因である。

それにしても、この文書は再利用の反故紙としては欠損がなく成立当初の姿を留めていることは貴重である。

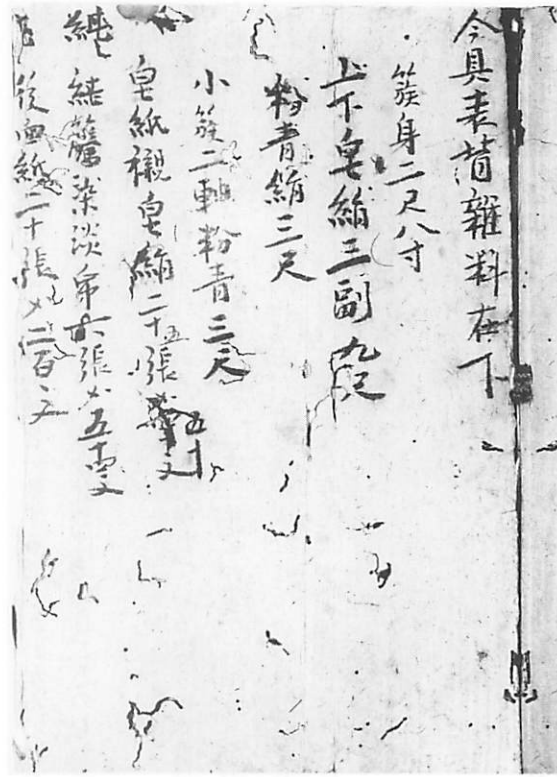


図5

- ① 今具表背雜料在
- ② 籐身二尺八寸
- ③ 上下皂絹三副九尺
- ④ 粉青絹三尺
- ⑤ 小簇二軸粉青三尺
- ⑥ 皂紙襯皂絹二十張^五×四十文^五
- ⑦ 純 結^結□染淡帛六張×五十四文

⑧ □ 後面紙二十張×二百文

所在 家字函(書陵部序列一一二號)第九帖『仏説六字大明王陀羅尼經』

他二経同卷(開元寺版)

料紙 黄檗染竹紙

法量 縦30・7 横20・0

書誌 背から右前部分までの芯紙として利用され右端中央部に卷緒が覗いている。ただし谷折り部分から左前までの表紙は欠落しているの、あるいは反故紙の現左端から先も表紙と共に欠落した可能性がある。

装潢に用いる材料の注文である。装潢全般の材料であるか、また何か特定の装丁用の材料であるのかはこれからでは明らかにならない。

②の「簇」はささ竹、③の「皂絹」の皂は早の俗字。黒の意。したがって皂絹は黒色の絹。④「粉青」は白みを帯びた緑色の意で、「粉青絹」はそのような色を持った絹。表紙用であろうか。

⑤の「小簇二軸」とは二本の意か。その下の「粉青三尺」は青の後に絹字が落ちたものであろうか。簇の用途は卷子の軸としても用いたかと思うが、表紙に使っ押さえ竹であるかも知れない。実際に本一切経中にも残存している。⑥の「皂紙襯皂絹」の襯は一枚重ねるの意であるから皂紙襯皂絹は黒絹に黒紙で裏打ちしたもの、であろうか。⑦の純は下に記される結の訂正か、しかし結の後の字は竹あるいは草冠に騰のように見えるが虫損もあり明らかでない。ただし純帛(シハク)なる用語があり、黒絹の意味がある。また⑧の最上部一字は左側が切られており、その先に文書が続く可能性がある。

「後面紙」についても明らかでない。

さて、ここには注分量と合計が出ているからその単価を知ることが出来る。
⑥皂紙襖皂絹が二五張で五〇文とあるから一張二文となる。⑦染淡帛は六張で五四文であるから一張九文、⑧後面紙は二十張で二〇〇文とあるから一張一〇文となる。

文書の年代は二号から四号と同時期の南宋後期であろう。

六、六号反故紙(図6)

所在 益字函(書陵部序列六六号) 第二帖 根本説一切有部毗奈耶 卷第

三十二(東禪寺版)

料紙 黄檗染竹紙

法量 縦30・4 横31・2

書誌 表紙芯紙全面に使用されている。裏面が表紙に接し天地は正位置である。右端中央に見られる長方形切り込みは巻緒孔跡である。

本紙は摺経であるが写刻体を体している。写刻体の摺経としては東禪寺版『楞伽経』の蘇軾のものが著名であるが、本紙の筆者は残念ながら明らかでない。内容は四〇巻本『大方広仏華嚴経』巻第四〇巻末の偈の中程にあたる。しかし、福州版一切経には五〇巻本および八〇巻本の『大方広仏華嚴経』は入蔵されているが四〇巻本は未入蔵である。本紙にはたまたま柱部分が残っており、「十四 選」と丁数と刻工が刻されている。しかしこの柱には千字文が刻まれていないから本紙は単行本の中の一紙であろう。竺沙雅章氏に

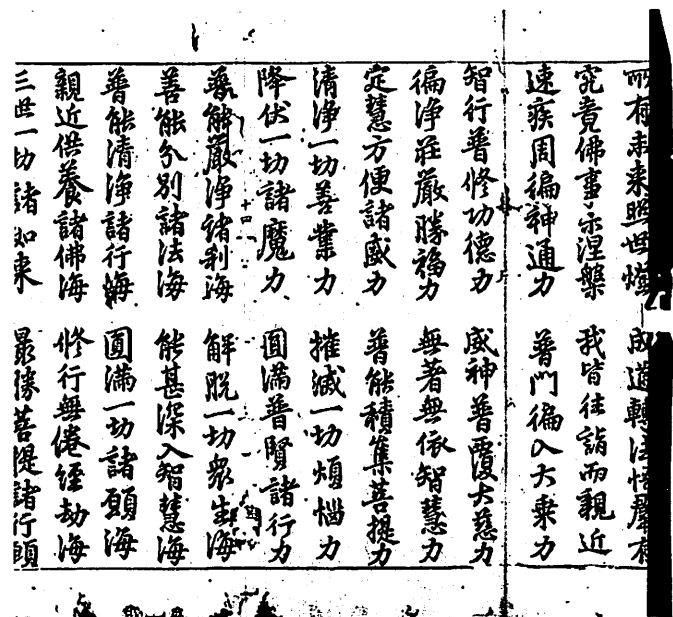


図6

よれば、宋元代には巻四〇だけの一巻本が盛んに行われたというから、本断簡もその類かも知れない。界高25・5センチ、一面五行、一行一五字ではじめにふれた福州版の標準規格とは異なる。刻工「選」は一切経に割合多く出る刻工の一人「高選」であろうか。

むすびにかえて

以上、一切経表紙中の芯紙に記されていた反故文書六通を紹介してきた。これらは六号を除き一切経の印刷に関わった工房の文書で、そこでは一切経

だけでなくほかの仏典等も扱っていたことは、五号、六号反故紙により明らかである。おそらくこの工房は「経鋪」⁽⁸⁾などと呼ばれる仏典専門の印刷出版業者と同じであると思われるが、これらの反故紙によりその姿がわずかながらも浮かんできたように思う。しかしながら明らかに出来なかつた部分も多く、ことに二号から四号は経済に関わるものでありその方面には素人の筆者の手には余るもので、見当違いなことを推測しているのではと恐れるものであるが、紹介する意味は十分にあると思われるので出来るだけ細かく報告したつもりである。今後専門の研究者によって改めて検証されれば幸である。最後にしたが、一切経の閲覧等にご高配を頂いた東寺・同宝物館および神奈川県立金沢文庫御当局に対しては厚く御礼申し上げる次第である。

注

(1) 拙稿「僧慶政と宋版一切経について」(神奈川県立金沢文庫保管「宋版一切経目録」一九九八 金沢文庫編)、なお慶政とその周辺僧の渡宋と補刻活動および九条家との関わりについては野口実「了行とその周辺」、牧野和夫「宋版一切経補刻葉に見える「下州千葉寺了行」の周辺」(共に「東方学報」京都第七三冊二〇〇二)、牧野和夫「十三世紀中後期をめぐるとの「文学的」な場について―意教上人頼賢「入宋」の可能性より延慶本「平家物語」と達磨宗の邂逅をめぐるとの二の問題に至る―」(中世文学四十六号 二〇〇一)が発表されているので参照されたい。
なお「法華山寺」印については前稿で開元寺版の殆どには見られるものの、東禅寺版には見られないとした。しかしその後の調査の結果、大般若經以外の東禅寺版には押印されている例があり、このことは東禅、開元両版混合は印刷時点で行われていたことを物語る。また、現在のところ大般若經に「法華山寺」印が見あたらないことからすると、大般若經とそれ以外の經典は印造時期を異

にする可能性もある。

(2) 高橋秀榮「北条実時が称名寺に寄進した宋版一切経」(神奈川県立金沢文庫保管「宋版一切経目録」一九九八 金沢文庫編)。

(3) 書陵部蔵の「驚」字函「雜寶藏經」「那先経」は開元寺版である。音釈を除き左の題記を持つ。

福州開元禪寺住持傳法賜紫慧通大師了一謹 募衆縁恭爲
今上 皇帝祝延 聖壽文武官僚資崇 禄位圓成雕造

毗盧大藏經板一副 時紹興戊辰閏八月 日 謹題

また、東寺蔵の「雜寶藏經」「那先経」のうち先述した五帖以外、即ち「雜寶藏經」卷一―六、「那先経」卷中東禅寺版である。したがって、東寺「驚」字函は混合函である。東禅寺版の題記は左の通り。

福州東禅等覺院住持傳法沙門智賢謹募衆縁恭爲

今上皇帝祝延聖壽閩郡官僚同資縁位雕造

大藏経印板計五百餘函時元符三年三月日謹題

(4) 本巻は無題記の東禅寺版であるがこの施財記を持つ版は管見ではほかに見ない(金沢文庫本は開元寺版、本源寺本は目録によれば版式が異なる)。東寺蔵が同版であるが修をうけてはいない。したがってこの補修は東寺蔵の刷印時期一四〇年代前半から一〇年以内に行われたものである。参考まで補刻の状況を示すと、第三紙一―三面の下八字分くらいを残し上部に埋め木しているようで、明らかに違いは「断」は「断」のように変更され、柱も「文句十 三 寿」が「文伯 十卷 三 寿」となる。丁数と刻工を示す「三 寿」は補修されていない。ほかには上界線が太めであることを除き全体に補刻部分との境が明瞭でなく丁寧な補修が行われている。

(5) 加藤繁「支那経済史考証」下一五六頁(東洋文庫論叢第三四 昭和二八年東洋文庫)。

(6) 本文書が所在する一切経の字函を千字文順に見ると、三号「悪」字が二七番目、二号「辭」字が二八一番目、また四号「通」字は四六六番目に当たる。

装丁する順番が千字文順であればこれらの日にはバラバラな印象を受ける。しかし、装丁にあたって大部な一切経は千字文順に行っていたのでは時間的なロスが多く、実際にはいくつかの組がありその組ごとに作業が進められたのではないだろうか。そうならば字函の間隔とは関係なく連続する文書が出てきても不自然ではない。

(7) 竺沙雅章「黒水城出土の遼刊本について」〔汲古〕四三号 二〇〇三(一)二二頁。

(8) 「経鋪」については先学により論文が公表されており、最近では竺沙雅章「宋代单刻本『法華経』について」〔汲古〕四〇号 二〇〇一、野沢佳美「中国『経鋪』考―宋―明代を中心に―」(立正大学人文科学研究所年報 別冊第一五号 二〇〇四)がある。

付記 二号―四号文書の説明の中で「丹」字の意味を零ではないかと述べたが、脱稿後明治大学講師石岡 浩氏から「漢語大詞典」(漢語大詞典出版社 一九九〇)に、丹は単に通じ零を意味することが記されていることのご教示を受けた。筆者の不明を恥じると共に氏のご厚意に謝意を表する次第である。これにより本稿でははからずも「丹」字字義の実例を示すことになった。